

令和2年度 第99回 全国高等サッカー選手権大会 総評

報告者：高体連技術部員 南稜高校 横山晃一

令和2年度第99回全国高等学校サッカー選手権大会が12月31日から1月11日の期間に開催された。決勝戦はPK戦までもつれ込む激戦となり、山梨学院高校（山梨県）が11大会ぶり2度目となる優勝を果たし、昨年度決勝戦で苦杯を嘗めた青森山田高校（青森県）は2年連続の準優勝という結果となった。3位は帝京長岡高校（新潟県）と矢板中央高校（栃木県）となったことから、4強中3チームが昨年度と同じ顔ぶれということになった。本県代表の昌平高校は準々決勝で、優勝した山梨学院と対戦し0－1で敗れたため、前回大会同様ベスト8となり、埼玉スタジアム2002凱旋まであと一歩及ばなかった。ここでは、（1）決勝まで上り詰めた山梨学院と青森山田両チームの特徴、（2）本県代表昌平高校の勝ち上がり試合分析、（3）大会全般の特徴について言及したい。

（1）決勝進出2チーム

優勝した山梨学院は自分たちの個性を活かしたスタイルを土台に、試合ごとに相手や時間帯、試合状況などに応じて1－4－4－2のベーシックな位置取りから変化していく柔軟な戦い方が特徴的であった。特に守備に関しては毎試合のスカウティングが徹底しており、相手のストロングポイントを消していた。そのうえで守備から攻撃に移る流れが明確にデザインされており、スタンドから見ていてチーム全体での狙いが共有・表現され、非常に興味深かった。1回戦の米子北戦こそ強風が吹き荒れるなかでの試合となり大味な印象が残ったが、準々決勝の昌平戦や決勝の青森山田戦では堅守速攻のチームカラーが存分に発揮された内容となった。MFとDFラインをコンパクトに保ち、ミドルサードでしっかりとプレスをかけながらボールを奪取。昌平・青森山田ともにボールロスト後の奪い返しが非常に速いため、カットしたボールは密集地帯で保持せずに1タッチで相手DFの背後へ配給していた。両チームともにビルドアップ時にSBが高いポジションをとることを逆手に取り、昌平戦ではスピード突破が売りの左SB②小澤、青森山田戦では攻撃参加に厚みを加える左SB③タビナスの背後のスペースへ2トップの一人を必ず走りこませる牽制を繰り返した。結果として昌平戦では②小澤のあがり鳴りを潜め、青森山田戦では③タビナスのあがったスペースの背後をついたところからMF⑩広澤の先制点が生まれた。山梨学院は右サイドにロングスローのあるMF⑧新井がいるので、ラインを割っても波状攻撃ができ、またボールを収めると逆サイドから決定力のある⑩広澤が飛び込める。相手のストロングポイントを消しながら自分たちの個性を発揮するという理にかなった戦いぶりであった。決勝戦で山梨学院FW⑳久保が青森山田主将のDF⑤藤原をマンマークするなど、奇抜な戦いが印象に残りがちだが、それはあくまで最後のエッセンスであろう。試合終盤まで組織的な守備が崩れず戦い抜けた背景には、一人ひとりの守備強度の強さがあることが大前提であり、セットプレー以外はDFが守備に専念すること、その分前線から規制をかけ続けるFWや両SHの運動量は選手層の厚さで補うなど、緻密さの積み重ねが可能にさせたといえそう。

青森山田は昨年同様準優勝で苦杯をなめることになったが、今年度公式戦無敗のまま決勝まで勝ち上がってきた所以を見せつける試合展開が多かった。特に個の強さが際立ち、球際の強度、キックの精度、プレー選択のスピードなど、山梨学院を凌ぐレベルを持っていた。ロングスローからの得点の多さが話題にのぼったが、それだけに留まらない多彩な攻撃の型を持っていることは明らかだった。特に堀越、矢板中央、山梨学院各試合で見た右クロスからのゴールは、キックの精度と中央の選手の動きの質が非常に高いプレーであった。

（２）昌平高校

初戦の高川学園戦（山口県）では、相手のミドルサードでの連続したプレスに手を焼き、セットプレーからの失点で１点を先行される厳しい戦いとなった。ペナルティエリアには進入するものの、シュートの精度を欠いたり、相手 GK①古屋の好セーブの前にゴールを割れない時間が続き、カウンターを浴びて失点し、点差が広がった。敗色濃厚のなかラスト５分で２アシストを記録した MF⑩須藤の集中力と技術は流石といえるが、途中投入でそれぞれゴールを決めた MF⑨篠田大、⑩篠田翼の活躍は、年々昌平の選手層が厚くなっていることを物語っている。終盤まで勝利への執念を燃やし続け、PK 戦で勝利したこの試合は、見ている者にこれぞ高校サッカーと思わせる感動を与えたに違いない。

２回戦の京都橘戦（京都府）、３回戦の創成館戦（長崎県）はともに、前線の４人が流動的にポジションを変え、ドリブルを織り交ぜながらプレスをかいくぐって相手をペナルティエリア周辺へ押し込むことに成功し、跳ね返してくるロングボールは CB を中心にしっかりと競り勝っていた。MF⑦小川と⑥柴の予測が素晴らしく、セカンドボールの回収からゲームを組み立てていく場面が何度も見受けられた。選手の個性が活きた会心の勝利であった。

準々決勝の山梨学院戦は、セットプレーからの失点後、最後まで１点が遠く無念の敗退となった。しかし、特に後半は引いてブロックを形成する相手に対し、持ち味のコンビネーションプレーや須藤、荒井の切れ味鋭いドリブルを駆使して何度もペナルティエリアへの進入を試み続けた。この試合における昌平のパフォーマンスは決して悪くなく、むしろ最後のところで突破を許さなかった山梨学院の選手一人ひとりの DF 対応力、深いタックル、シュートブロック、GK①熊倉の好セーブが見事だったと言わなければならない。

昌平はボランチを中心に後方からゲームを組み立てる、狭いスペースでも人数を掛けてドリブルやショートパスで打開する、SB が積極的に攻撃参加するというチームカラーが定着しつつある。さらに今年度は FW⑪小見のオフザボールの質の高さがあることで、背後へのロングボールという得点パターンも加わった。選手の将来性を考え、個性を活かしたサッカーをする点が魅力といえるが、今後はさらにこのサッカーを昌平哲学として突き詰めていくのか、新たに高さなどダイナミックなプレーも取り入れていくのか、いずれにしても今後は楽しみなチームである。課題点としては、高川学園戦も山梨学院戦も前半にセットプレーから失点したことでゲーム運びが非常に苦しくなったことであろう。今後は GK も含めたセットプレーの守備力を上げれば、さらに驚異的なチームに成長すると感じた。

（３）大会全般

新型コロナウイルスによる影響で思うようなチーム強化が進まないなか、DF 時の連携ミスが多いように感じられた。先に述べた昌平のセットプレーの失点もそうであるが、特に GK と DF の間のスペースにボールが出たときに判断ミスが生じるケースが多々あった。今後はロングスロー対策も含めて各チーム改善を図ってほしい。また１・２回戦では判断を伴わないロングフィードを多用する場面が多く、もう少し状況によって確実性の高いプレーを選択する必要があったのではないだろうか。さらに言えば CB は高さがあり、跳ね返す力が高い選手が多かったものの、後方からビルドアップの中心となり、目の覚めるような楔のボールを入れられる選手がもう少し見たかった。その点では青森山田 CB⑤藤原や帝京長岡 CB④松村などはビルドアップ時にも長短でリズムをつけられる選手だった。

今大会は準備期間から感染予防対策に神経をすり減らして過ごす大変な状況であった。宿舎においても選手間のコミュニケーションが制限され、食事もチーム内で時差を設けて摂るなど、各チーム様々な対策を練っていたようだ。そんな中で無事にこの大会が終えられたことは各チーム・選手が並々ならぬ我慢と規律のもとでトレーニングその他に励んだ証であろう。次回大会は記念すべき１００回大会を迎える。

埼玉県代表となるチームには全国の頂に立ってもらいたいという期待とともに、大会内容も過去最高と呼ばれるものとなるように各チーム修練を積んでももらいたい。